吉満義彦の見たフランス哲学

伊藤潤一郎

Ⅰ　はじめに

かの有名な「近代の超克」をめぐる座談会において小林秀雄は，近代日本における哲学の言葉が「日本人の言葉としての肉感を持つて居ない」と批判し，文学者に比べて「哲学者は非常に呑気である」と評している[1)]。小林の問いかけは西谷啓治と吉満義彦に対して向けられたものだが，それに対し西谷は，西洋の哲学を日本語で表現することの難しさを認めつつも，むしろ自分たちは「西洋の思想家を相手にして居る」のであり，たんに西洋の哲学を学ぶだけではなく，それをさらにみずからの手で先に進めようとするならば，「一般の日本人に分り易いやうな言葉で書くといつても，実はさういふことをする暇がない」と応答する[2)]。それに対し，吉満の答えはどうであったかといえば，彼は唐突に「吾々の哲学徒がこんな文章を書くやうになつたのは，それはドイツ文献の影響があるとも思はれる」[3)] と，西谷が「西洋」の哲学として語った問題を「ドイツ」へと限定する発言を返し，それに応じるかのように文学者の立場から先の問いを投げた小林が今度はベルクソンをもちだしてきて，吉満がフランス哲学とドイツ哲学の違いを語るというように座談は進んでいく。その際の吉満の応答はフランスとドイツのどちらかに肩入れするものではないが，小林の最初の問いかけに対し吉満が「ドイツ文献の影響」を指摘したことは，おそらく近代日本における哲学の受容を垣間見せるものだろう。熊野純彦が述べるように，「辰野隆以来，小林秀雄にいたるまで，官学の仏文科出身者たちはこの国のアカデミズム内部におけるドイツ哲学一辺倒のありかたに対して異をとなえつづけ」[4)] たのであり，それゆえに小林は，些細で通りがかりの発言のようにも思える吉満の「ドイツ」という言葉に敏感に反応してベルクソンの名を挙げたにちがいない。ドイツかフランスかという対立を殊更に強調することは，それら内部での差異を無化し，ネーションや「国語」を単位とする思考に加担してしまう危険がともなうが，近代日本における哲学の受容に関していえば，おそらく言語上の区分はそれなりに重い意味をもたざるをえないだろう。現在でも「日仏哲学会」や「日本イギリス哲学会」が存在するのに対し，ドイツを名に冠した哲学の学会が存在しないことは，ドイツ哲学が無徴の哲学たりえた歴史を示唆している。

本稿が光を当てる吉満義彦は，ドイツの神学者カール・アダムの翻訳を手がけ，最初の単著『カトリシスム・トマス・ニューマン』において「現代ドイツ・カトリックの宗教哲学者エーリッヒ・プシュワラ師の諸著に負うものが多」[5)] いと記すなど，ドイツ語圏の思想から少なからぬ影響を受けつつも，それと同時に九鬼周造や三木清と並んで戦前の日本の哲学界においてフランスとの窓口となっていた人物のひとりだといえよう。なかでも，吉満の名は留学中に師事したジャック・マリタンと結びつけられることが多い。岩下壮一の勧めで取り組んだマリタン『スコラ哲学序論』の翻訳（のちに『形而上学序論』と改題・改訳される）や数々のマリタン論は，

マリタンとその新トマス主義という 20 世紀前半のフランスにおける思想風景の重要な一角を早い時期に日本に導入した仕事として位置づけられる。また，1928 年春から 1930 年秋にかけてのパリ留学は，マリタンとその周辺の知識人たちに吉満の足跡をくっきりと残しており，マリタンの『手帳』にはみずからが設立した「トミスト研究サークル」の参加者のひとりとしてその名が挙げられているとともに，留学中の吉満が激しい喀血に襲われたことも記されている[6)]。また，近年刊行されたマリタンとルイ・マシニョンの書簡集において，マシニョンが 1928 年と 1930 年の二度にわたって吉満に言及していることも注目に値する[7)]。

従来の吉満についての研究は，近代日本におけるカトリック思想家としての側面に光を当てたものが多く[8)]，なかでも岩下壮一や田中耕太郎とともにカトリック知識人としての吉満を歴史的に考察した半澤孝麿の研究が先駆的なものとして名高い[9)]。それに対し本稿は，上述のように吉満が近代日本のフランス哲学受容において重要な位置を占めていたことに鑑み，この早世した哲学者によって 1930 年代の日本にいかなるフランス哲学が伝えられていたかを考察することを目指すものである。とはいえ，吉満がもたらしたフランス哲学の全容を明らかにすることはそれだけで一書を必要とするような課題であるため，ここではひとつの論考に焦点を絞って考察を進めていく。その論考とは，東京帝国大学文学部倫理学会の雑誌『倫理研究』の第 12 号と第 13 号に分載された「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて」[10)] である。これは，1930 年 9 月 23 日の東京帝国大学倫理研究会における講演と同年 11 月 28 日に文理科大学倫理研究室でおこなわれた講演をもとにした論考であり，時期を見るに吉満がフランスから帰国した直後の講演であることがわかる。そこで吉満に求められていた役割は，おそらく当時のフランスの思想界をリアルタイムで見てきた者による報告だっただろう。論考が掲載された 1931 年時点の吉満は，すでにマリタンの『スコラ哲学序論』の翻訳を世に問うてはいたが，自身の手になる研究論文としてはフランスの状況を紹介するこの論考が最初のものにあたる[11)]。それゆえ，近代日本を代表するカトリック哲学者となっていく吉満が最初期にフランス哲学をどのように受け止めていたのかを見ておくことは，けっして長くはないその活動期間の全貌を捉えるために重要なことであるにちがいない。しかし，それだけでなく，吉満義彦が見たフランス哲学の姿を明らかにすることは，近代日本におけるフランス哲学受容の一端を解明することにもなるはずである。本稿では，そのような大きな目標を視野に入れつつ，吉満の最初期の論考を読み解いていきたい。

Ⅱ　『倫理研究』とフランス哲学

まずは，吉満が関わっていた東京帝国大学倫理学研究室と『倫理研究』について必要な範囲で情報を整理しておこう[12)]。吉満が東京帝国大学倫理学科に入学したのは，1925 年 4 月のことだが，歴史を振り返れば，東京帝国大学に倫理学の講座が設置されたのは 1893 年のことであり（当時は 1897 年の京都帝国大学設立以前のため，正確には地名の付されていない「帝国大学」が正式名称），「心理学・倫理学・論理学」の第二講座が倫理学と論理学を兼ねた講座だった。その後，1918 年に倫理学講座として独立し，1926 年には第二講座が増設されている。担当者は，1918 年までが中島力造，つづいて 1933 年までが吉田静致であり，増設の第二講座は 1935 年まで深作安文が担当していた。三者に共通するのは，中島によって紹介されたＴ・Ｈ・グリーンの思想を

もとに，それぞれが独自の仕方で「人格主義」を提唱したことだとされる[13]。1933年に吉田が退官した後，第一講座は深作と哲学科の桑木厳翼が一時的に分担していたが，1934年7月に和辻哲郎が教授として就任する（1949年に退官）。和辻は，1935年の深作の退官後は第二講座も分担していたが，1939年から第二講座は金子武蔵が担当者となった（1965年に退官）。以上の期間に関して，『東京大学百年史』の倫理学の部局史に講義担当者として名前が挙がっているのは，藤井健治郎，友枝高彦，土田誠一，長屋喜一，村岡典嗣，そして吉満義彦である。

また，東京帝国大学文学部倫理学研究室の倫理学会と『倫理研究』誌についても基本的な部分をまとめておけば，1929年の雑誌創刊当時の学会長は第一講座担当教授の吉田であり，評議員には深作，友枝，藤井のほか，慶応義塾大学教授の川合貞一や早稲田大学教授の杉森孝次郎ら学外者も名を連ねていた。雑誌自体は1929年4月から1933年3月まで計24号が刊行されており，研究論文が掲載されるだけでなく「紹介」や「海外通信」の欄が適宜設けられ，外国語の文献の紹介や翻訳も積極的におこなわれていた点は注目しておくべきだろう。吉満に関していえば，すでに留学中の1930年4月刊行の第7号でプシュヴァラ「トーマスとヘーゲル」の翻訳が掲載されている（吉満による表記は「プシュワラ」）。本稿が扱う「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて」につづいて，第22号にも「聖トーマスにおける人間概念の形而上的構成に就いて」という論考が掲載されており，こうした点を踏まえれば吉満は同誌と継続的な接点をもっていたといえるだろう。また，1929年4月刊行の『倫理研究』第5号に掲載された倫理学会のはじめての会員名簿にもすでに吉満の名があり，留学中のフランス・ムードンの住所が記載されている。

以上の簡単な情報整理において名前を挙げた倫理学研究室の関係者を見ればわかるように，ここにもやはり近代日本の哲学受容のあり方が表れているといえるだろう。熊野が指摘していたような「ドイツ哲学一辺倒」とまでは言い切れないが，少なくとも吉満を除けばフランス哲学をみずからの研究の主軸とする者が不在であることはたしかだ。『倫理研究』の誌面を見ても，カント，フィヒテ，ブレンターノ，リッケルト，シェーラー，ハルトマン，ハイデガーらドイツ語圏の哲学者の名が多く並び，それ以外ではアリストテレスを中心とした古代ギリシア，グリーンやミルといったイギリス哲学を扱った論考が散見される。また，馬場文翁による「ベルリンだより」（のちに「ドイツ通信」と改題）が五回にわたって掲載されていることも特筆すべきことだろう。それに対し，フランス哲学に関するものは，吉満の論考以外では，後に国士舘大学教授となる木村伊勢雄のベルクソン論[14]とエマニュエル・ルルーの翻訳[15]にほぼ限られている。倫理学研究室および『倫理研究』にも，近代日本の西洋哲学の受容のあり方は明らかに影を落としているといえるわけだが，それではそうした環境下で吉満はいかなるフランス哲学を伝えたのだろうか。実際に吉満の論考を読み解いていきたい。

Ⅲ　現代フランス哲学としての「トマス的スコラ的立場」

「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて」（以下「現代仏蘭西」）は，戦後まもなくみすず書房から刊行が始まった『吉満義彦著作集』にも，1980年代に講談社から刊行された『吉満義彦全集』にも収録されていない。また，若松英輔を編者とする最新の文庫版選集『文学者と哲学者と聖

者』[16] にも当然ながら収められておらず，こうした事情ゆえに，「現代仏蘭西」は吉満の論考のなかでもこれまで注目されてこなかったものだといえる。

二号に分けて掲載された論考は，「（一）現代仏蘭西の魂の姿」，「（二）現代仏国哲学界の方向」，「（三）現代仏国社会学倫理学界の方向」の三つのパートに分かれており，このうち（二）と（三）の記述に関しては，吉満自身によって参考文献が挙げられている（12 ／ 38，13 ／ 70）。そのなかで最も重要だと考えられるのが，ドミニク・パロディによる『フランス現代哲学――学説分類の試み』[17] である。現在ではパロディという哲学者についてもこの著作についても顧みられることはほとんどないが，大正から昭和初期にかけてパロディのこの本が広く読まれていたことは確認しておく必要があるだろう。フランス哲学を専門とする三宅茂 [18] によって 1925 年に最初の日本語訳が出版され，1937 年には改訂版も出ており，同時代のフランス哲学に関心をもつ者は，まずパロディの描いた地図を手がかりにすることが多かったようだ [19]。事実，吉満の論考の二年後の 1933 年に岩波書店から刊行された河野與一の『現代仏蘭西哲学』においても，冒頭で「現代仏蘭西哲学，この題目からすぐに思ひ当る書物は正に問題のパロディの著」[20] と述べられ，パロディの著作の特徴が簡潔に記述されたのち，同時代のフランス哲学の動向を知るためのさまざまな文献が紹介されていくが，それらのほとんどはパロディの著作とどこが異なるかという観点からまとめられている。また，九鬼周造が 1929 年から京都帝国大学でおこなった講義録『現代フランス哲学講義』（1957 年刊行）にも，「現代フランス哲学参考書」として最初にパロディの著作が挙げられており [21]，『フランス現代哲学』が大きな影響力をもっていたことがうかがえる。

パロディを比較項として吉満の「現代仏蘭西」を読むと，この論考の力点がどこにあったかが明瞭に見て取れる。まずは，吉満が紹介している固有名をパロディの著作と引き合わせ，前者のみが挙げている名を列挙してみよう。登場順に挙げていけば，ジャック・シュヴァリエ（Jacques Chevalier），ウラジミール・ジャンケレヴィッチ（Vladimir Jankélévitch），レジナルド・ガリグー＝ラグランジュ（Réginald Garrigou-Lagrange），アントナン＝ジルベール・セルティヤンジュ（Antonin-Gilbert Sertillanges），エミール・ペイヨーブ（Émile Peillaube），ピエール・ルスロ（Pierre Rousselot），ペドロ・デコック（Pedro Descoqs），デジレ＝ジョゼフ・メルシエ（Désiré-Joseph Mercier），シャルル・サントルール（Charles Sentroul），ヨーゼフ・ガイザー（Joseph Geyser），ジョゼフ・マレシャル（Joseph Maréchal），エーリヒ・プシュヴァラ（Erich Przywara），モーリス・ド・ヴルフ（Maurice De Wulf），シモン・ドゥプロワジュ（Simon Deploige），マルタン＝スタニスラス・ジレ（Martin-Stanislas Gillet），ベルナール・ロラン＝ゴスラン（Bernard Roland-Gosselin），オリヴィエ・ルロワ（Olivier Leroy）となる。このうち気鋭のベルクソン研究者として紹介されているシュヴァリエとジャンケレヴィッチを除けば，ほぼ「新トマス主義」ないし「新スコラ哲学」の流れを形成する哲学者・神学者の名が挙げられていることがわかるだろう（吉満自身は，「スコラ的トーマス的哲学」（12 ／ 26）や「カトリック的思想方向におけるトマス的スコラ的立場」（13 ／ 51）といった言葉を用いる）。ガイザーやプシュヴァラなど，ときに「フランス」という枠組みの外にまで及んでいることからも，吉満がいかに力を入れてこの思想潮流を紹介しようとしているかが見て取れる。

むろん，吉満がフランスで師事していたのが，新トマス主義の中心人物のひとりであるマリ

タンであったことを考えれば（マリタン自身は「新トマス主義」という語を積極的には引き受けないが），こうした力点の置き方は当然のことだろう。吉満自身，論考の冒頭において，みずからが留学したのは現代のフランス哲学を研究するためではなく，「スコラ哲学更らに具体的に言へばトマス哲学を攻究しそこにおいて現代を反省し検討する」（12 ／ 15）ためであったと述べている。とはいえ，ここで明確にしておかなければならないのは，吉満によって新トマス主義が当時の他の思想潮流のなかでどのように位置づけられていたかという点である。「現代仏蘭西」の第二パート「現代仏国哲学界の方向」では，当時のフランスの哲学界が二つの勢力に分けて描きだされており，ある意味では弁証法的ともいえる図式化のもとさらに新トマス主義の重要性が打ち出されていく。吉満自身の言葉によってこの点を確認しておきたい。

> 一切の哲学は今日においては「科学批判」となつて居る。此の科学批判の問題を中心にして理性と経験の，実在の合理性と非合理性の，観念論と実在論の対立が愈々鋭くなって居る。即ち科学的機械的実在説明に対する理性と生命との反抗乃至反省と言ふのが今日の哲学界の姿である。而して私は此の「科学批判」を中心とする仏蘭西哲学の動きを通じてパスカルの天才がよく弁別した所の l'esprit de finesse と l'esprit géométrique の，或ひは「心の論理」と「理性の論理」との二つの魂の動きを指摘し得ると思ふ。論理性明瞭性（clarté）を求むるラテン的理性的要求と，人間性の寧ろ非合理的な心の欲求，暗き神秘の淵に光りを見出さんとする芸術的乃至宗教的要求とが二つながら仏蘭西思想を表現するのである。而して前者の哲学的動きを表はすものが即ち合理主義（ラシオナリスム），観念論（イデアリスム）であり後者のそれを示すものは反理性主義，直観的実在論であるが，現代仏蘭西においては此等の二つの動きの外に第三の立場，即ち前者観念論的立場に就いては理性主義的要素を取るもその主観主義的方向を排拒し，後者の立場よりはその実在論的方向を取るも反理性的主張を排除するスコラ的トーマス的哲学方向の存する事を忘れてはならない。（12 ／ 25 - 26）

〈心の論理／理性の論理〉ないし〈反理性主義･直観的実在論／合理主義･観念論〉という対立，さらにこの二項対立に対する第三の立場としての新トマス主義という構図は，ベルクソンを中心に形成されている。ベルクソンを「新しき精神主義的形而上学的哲学」（12 ／ 28）の構築者と捉えるのが「心の論理」などと括られている立場であり，ここにはエドゥアール・ル・ロワやジョルジュ・ソレルら，宗教的であれ政治的であれベルクソンの哲学を積極的に引き受けた哲学者が分類されている。ル・ロワの名が示唆するように，カトリック思想としてみれば新トマス主義に対するモデルニスムの思想家がここには含められているといえるだろう。こうした「心の論理」と対になるのが，「デカルト，マルブランシュ以来」（12 ／ 34）の合理主義の方向性であり，レオン･ブランシュヴィック『数理哲学の諸段階』のようなエピステモロジーのほか，ジュール・ラシュリエやジュール・ラニョーといったいわゆる反省哲学も含められている。以上の「心の論理」と「合理主義」のどちらに関しても，吉満の筆の運びはそれぞれの哲学者の概要を短く紹介していくといった趣であり，パロディを下敷きにしているところも散見され，要約の域を出ることがほとんどない。

ここで論考の第三パート「現代仏国社会学倫理学界の方向」に目を転じてみよう。すぐに気

づくのは，社会学・倫理学に関しても，哲学と同じ三項図式が取られていることである。ふたたび吉満自身の言葉でこの図式を確認しておきたい。

> 仏蘭西倫理学界においては此の社会学的実証的研究と説明を以て一切となす所謂社会学派（école sociologique）と，此れに対して，道徳の社会的本質を認めつつも，又道徳体験の直接的内観において道徳現象の特性を捕捉せんとする直観的言はば現象学的批判と，ラシオナリスト的新らしき理性的道徳体系を志す動きと，更らには道徳現象，宗教現象等の社会的本質の実証的指摘を認めつつも，人間の理性的人格的本性の擁護と根本的把持とを以て現代の道徳問題に直面するカトリック的思想方向におけるトマス的スコラ的立場が指摘されねばならない。（13 ／ 51）

社会学・倫理学に関しては，新興のデュルケーム社会学と伝統的な倫理学の関係を軸に二項対立が設定され，両者に対する第三の道として新トマス主義が打ち出されるというかたちとなっており，第二パート「現代仏国哲学界の方向」における議論と相似形の構図が認められる。どちらのパートにおいても新トマス主義が対立する二つの思想を弁証法的に止揚するものであるかのように提示されているわけだが，実際のところ吉満が語る新トマス主義の内実とはいかなるものなのだろうか。たしかに新トマス主義に関しても，先に挙げた哲学者や神学者の著作が簡単な紹介とともに並べられているだけの箇所もあるが，「現代仏蘭西」という論考全体を見渡してみれば，各所に吉満自身の新トマス主義に対する態度を読み取ることができる。それを簡単にまとめれば，まずもってマリタンに代表される新トマス主義は，「l'esprit de la reconstruction（改造の精神）」（12 ／ 16）を示すものだとされる。この言葉自体は，「l'esprit de l'inquiétude（不安の精神）」とともに当時のフランス知識人の二つの方向性を特徴づけるものとして留学中の会合で聞いたとされており（つまり吉満自身の言葉ではない），「再建の精神」とも訳すことができるであろうこの「改造の精神」には，マリタンらの新トマス主義と「コミュニスト的社会主義運動」の二つが含まれると吉満は言う。しかし，当然ここでも重きが置かれているのは前者であり，「改造の精神」としてのマリタンの思想は，「伝統の永遠なるものの現代的意義による思想運動」（12 ／ 16）とも，「永遠のカトリック的真理と聖トマスの哲学的叡智の現代的意識に基づく宗教的方向」（12 ／ 19）とも特徴づけられている。もともと『アエテルニ・パトリス』（1879 年）におけるレオ 13 世の呼びかけを契機とする新トマス主義が，発展する諸科学の成果を吸収してトマス哲学を現代において復興しようとするものであったように，新トマス主義とはトマス哲学を現代思想として蘇らせる思想運動であり，吉満が「現代的」という言葉をくりかえし用いていることは正鵠を射ているといえよう。いわば，吉満は鋭い「現代的意識」をもった思想潮流である新トマス主義を中心に当時のフランスの思想地図を描くことによって，「現代フランスの哲学・倫理学」という報告テーマに応えたわけだ。

しかし，新トマス主義における「現代」とは，「現代思想」という言葉がともすれば含意する「最新」や「最先端」とは異なり，とりわけマリタンにおいては「アンチモダン」の方向へと向かうものであった点に注意が必要だろう。吉満もマリタンをパスカルやジョゼフ・ド・メーストルらと並べ，「Antimoderne !」（13 ／ 65）と記していることから明らかなように，マリタンが反

近代的精神の持ち主であったことを明確に理解していた。マリタン当人は，「私がここで「アンチモダン」と呼ぶものは，「ウルトラモダン」とも呼ばれたかもしれない」[22] と書き記しており，その思想を「アンチモダン」とのみ形容することには若干の留保が必要だが，反近代と超近代がつながり，神学的な保守主義と政治的なラディカリズムが同居する多面的で複雑なマリタンの思考が，吉満によってフランスの「現代」の哲学として紹介されたとき，キリスト教の信仰をもたない哲学や倫理学の研究者たちがそれをどのように位置づけるべきか困惑したであろうことは想像にかたくない。さらにいえば，マリタンのベルクソンに対する態度もまた戸惑いを誘うものだっただろう。当時の日本においてベルクソンは，デカルトやパスカルと並ぶフランス哲学の代名詞であるとともに，吉満の論考の翌年の 1932 年に『道徳と宗教の二源泉』が出版されているように，1930 年代初頭を生きる人々にとってベルクソンはまさに同時代人であった。「ベルグソンが現代仏蘭西哲学界に最も強く輝く星であることは争はれない」[23] と述べる河野與一の言葉は，ひとり河野だけのものではなく当時の一般的な認識であったにちがいない。そのような状況において，「ベルクソンよりトマス・アクイナスへと進んで行つた近代の改宗者」（12 ／ 30）であるマリタンの思想は，現代を語る哲学が中世哲学へ向かうという特異な道を示すものであった。つまり，留学帰りの吉満が紹介したマリタンをはじめとする新トマス主義は，復古的な装いのもとに「現代」を語る思想だったのである。吉満にとってはそれが「現代」と向き合う哲学であることは自明のことであっただろうが，おそらく他の人々にとっては，現代哲学として語られたマリタンの姿は容易には理解しがたいものであったはずである。

Ⅳ　おわりに

ここまで見てきたように，吉満が現代フランスの哲学として紹介したマリタンら新トマス主義の動向には，表層的に「現代」という言葉を捉えたのでは理解しえないある種のねじれが存在していた。さらに，「ここにおいてか問題は竟ひに永久の問題宗教的根本態度に迄帰着するのではないか！」（13 ／ 70）という結びの言葉は，吉満の報告が最終的に現代フランスの哲学・倫理学という枠からずれて，宗教思想ないしカトリック思想の紹介であるという印象さえ与えるものであったかもしれない。また，当然のことながらカトリック思想はフランス語圏に限定されるものではなく，新トマス主義の中心であるベルギーのルーヴァン大学に設置されたトマス講座の初代教授を務めたメルシエをはじめ，フランス語で著作を発表する新トマス主義者がいる一方で，吉満も名前を挙げているガイザーなど他の言語で活動をおこなっていた者も多い。つまり，新トマス主義と「フランス」という枠組みは部分的に重なるものでしかないのである。それゆえこの点において，吉満による現代フランス哲学の紹介は，期待された枠組みから少なからず逸脱したものであったといえるだろう。

実際，その後，マリタンや新トマス主義はフランス哲学研究においてというよりも中世哲学研究において受容されていった。吉満の論考の翌年には，岩下壮一が新スコラ哲学についての著作[24] を発表し，さらに数年後にはマリタンの翻訳[25] を刊行している。戦後に目を移せば，とりわけ稲垣良典の諸著作はカトリック思想を「現代思想」として捉える立場を打ち出している点で，吉満の論考と通底する部分があるといえよう[26]。とはいえ，「フランス」という視座が無

効になったわけでもない。実際，吉満とマリタンの思想はフランス文学と関わりの深い人々に大きな影響を与えている。「吉満がマリタンから受け継いだのは，ネオトミスムという新思潮であるより，文学と哲学の間に作られた壁を打破することだった」[27] と若松英輔は述べているが，吉満の思考を受け継いだ者のなかではたしかにフランス文学者の存在が際立っている。ライサ・マリタンやエマニュエル・ムーニエなどの翻訳で知られる木村太郎や批評家の越知保夫など，吉満の周辺に集ったフランス文学者たちは哲学と文学を越境するような仕事で大きな成果をあげている。吉満の周辺では哲学と文学の交差というフランス的思考の特徴が如実に表れていたといえよう。フランスにおける哲学と文学の越境ということでは，戦後のサルトルやボーヴォワールがまず思い浮かぶところだが，1930 年代に吉満が紹介したマリタンのうちにも，すでに哲学と文学が混交する事態を見て取ることができるのであり，実際に吉満は「現代仏蘭西」において何度も文学者に言及をおこなっている。

とはいえ，これまで見てきたように，マリタンや新トマス主義を紹介する吉満において生じていたのは，哲学と文学の越境だけでなく，現代哲学と中世哲学，そして哲学と宗教との越境的対話でもあった。それゆえ，1930 年代の日本の哲学界に吉満がもたらしたのは，のちに「フランス的」と形容されることの多い哲学と文学の交差にとどまることのない領域と時代の横断性であったといえるだろう。吉満義彦とは，そのような越境性を一身に体現した稀有な思想家だったのである。

注

1）河上徹太郎，竹内好ほか『近代の超克』，冨山房，1979 年，248 頁。以下，引用に際し漢字は新字体に改めた。

2）同書，249 頁。

3）同書，249 - 250 頁。

4）熊野純彦編著『日本哲学小史――近代 100 年の 20 篇』，中央公論新社（中公新書），2009 年，20 頁。

5）『吉満義彦全集　第四巻　神秘主義と現代』，講談社，1984 年，289 頁。

6）Jacques Maritain, *Carnet de notes* [1965] in *Jacques et Raïssa Maritain Œuvres complètes*, vol. XII, Éditions universitaires, Éditions Saint-Paul, 1992, p. 327-329.

7）Jacques Maritain et Louis Massignon, *Correspondance : 1913-1962*, présentée, établie et annotée par François Angelier, Michel Fourcade et René Mougel, Desclée de Brouwer, 2020, p. 508 et 543.

8）近年の代表的なものとして，鶴岡賀雄「吉満義彦の「近代日本カトリシズム」」（『季刊日本思想史』，No. 72，ぺりかん社，2008 年，89 - 106 頁）や，村松晋『近代日本精神史の位相――キリスト教をめぐる思索と経験』（聖学院大学出版会，2014 年）などがある。

9）半澤孝麿『近代日本のカトリシズム――思想史的考察』，みすず書房，1993 年。所収の吉満論の初出は 1966 年である。

10）「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて」『倫理研究』，第 12 号，三省堂，1931 年，15 - 39 頁。「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて（承前・完）」『倫理研究』，第 13 号，三省堂，1931 年，50 - 72 頁。以下，本論考からの引用は，（12 ／ 15）のように（号数／頁数）の順に本文中に表記する。

11）これは研究論文に限ってのことであり，同時期にはプロテスタントからカトリックへ改宗した経緯を記したエッセイ「私の改宗」が『カトリック』誌に発表されているほか，前年の 1930 年には町田實の遺稿集に追悼文「町田君の問題」が寄せられている。吉満義彦の文献については，全集第五巻に収録された増田良二による「著作目録」と，若松英輔『吉満義彦――詩と天使の形而上学』（岩波書店，2014 年）

の「年譜」を参照のこと。

12）本段落の記述は，『東京大学百年史　部局史 1』（東京大学百年史編集委員会編，1986 年）にもとづいている。

13）同書，555 - 556 頁。

14）木村伊勢雄「ベルグソンと自由意志問題」『倫理研究』，第 2 号，1929 年，112 - 122 頁。

15）エンマニュエル・ルルー「戦後に於ける仏蘭西の倫理思想」木村伊勢雄訳，『倫理研究』，第 7 号，1930 年, 186 - 198 頁。エンマニュエル・ルルー「戦後に於ける仏蘭西の倫理思想（承前）」木村伊勢雄訳，『倫理研究』，第 8 号，1930 年，84 - 106 頁。これは，次の論考の翻訳である。Emmanuel Leroux, « Ethical Thought in France Since the War », *International Journal of Ethics*, Vol. 40, No. 2（Jan., 1930）, p. 145-178.

16）吉満義彦『文学者と哲学者と聖者――吉満義彦コレクション』若松英輔編，文藝春秋（文春学藝ライブラリー），2022 年。本書巻末の「吉満義彦年譜」は，前掲の若松『吉満義彦』の「年譜」をもとに作成されたものだろうが，文庫版の紙幅の都合ゆえか，残念ながら『吉満義彦』の「年譜」には記載されていた「現代仏蘭西の哲学倫理学界に就いて」の記述が 1931 年の欄から削除されてしまっている。

17）Dominique Parodi, *La philosophie contemporaine en France : essai de classification des doctrines*, Félix Alcan, 1919 ; 2e éd. revue, 1920 ; 3e éd. revue et augmentée d'un appendice, 1925. 第三版には，「1918 年から 1925 年のフランス哲学（La philosophie française de 1918 à 1925）」という補遺が付されている。

18）三宅の遺著となった『パスカルと哲學』の「序」を執筆した桑木厳翼は，三宅について次のように述べている。「三宅君はもと外国語学校で仏語を修め，後東京帝国大学に入って哲学を専攻した人である。仏語によつて一般の哲学を研究することは固より不可能ではなく，殊に仏蘭西に於ても卓越せる思想家が缺けては居ないが，一方に他国語の知識も必要である。氏は是等の点に於て用意を怠ることなく，卒業後も学事を継続し，屢々論文著訳を公けにして，時には教授であつた私等の私宅を訪問することもあつた」（桑木厳翼「序」, 三宅茂『パスカルと哲學』, 第一書房, 1941 年, 3 頁）。「不可能ではなく」や「卓越せる思想家が缺けては居ない」といった否定表現を用いた桑木の言い回しには，フランス語圏の思想を傍流とみなす意識が垣間見える。

19）ドミニック・パロディ『現代佛蘭西學派の哲學』三宅茂訳，春陽堂，1925 年。ドミニック・パロヂ『現代フランス哲學』三宅茂訳，春陽堂，1937 年。前者は，原書の初版と第二版を底本としつつ，訳者による削除や加筆がなされている。後者は，原書第三版刊行以後に改訂されたものだが，第三版を底本としたとは明記されておらず, 原書に増補された「1918 年から 1925 年のフランス哲学」はその一部が「補遺」の項に訳出されるにとどまっている。パロディの翻訳に関しては，鈴木由加里が三宅茂による「訳者の序言」に注目して，この訳書がドイツ哲学を優位とする近代日本のアカデミズムを批判し，さらにはフランス哲学の優位を説くものであったことを指摘している。鈴木由加里「日本におけるジャン - マリー・ギュヨーの受容について」『人文』，第 5 号，学習院大学人文科学研究所，2007 年，39 - 56 頁。

20）河野與一『岩波講座哲學〔現代の哲學〕現代佛蘭西哲學』（上・下），岩波書店，1933 年，3 頁。

21）『九鬼周造全集　第八巻』，岩波書店，1981 年，123 頁。

22）この箇所は次のようにつづく。「周知のようにカトリシズムは, 伝統への確固たる結びつきによって「アンチモダン」であると同時に，世俗の生において生じる新たな条件に適合しようとする大胆さによって「ウルトラモダン」でもある」（Jacques Maritain, *Antimoderne* [1922] in *Jacques et Raïssa Maritain Œuvres complètes*, vol. II, Éditions universitaires, Éditions Saint-Paul, 1987, p. 928）。「アンチモダン」の思想家としてのマリタンについては，アントワーヌ・コンパニョンの研究を参照のこと。Antoine Compagnon, *Les antimodernes : de Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Gallimard, coll. « Folio essais », 2016 [2005].〔『アンチモダン――反近代の精神史』松澤和宏監訳，鎌田隆行・宮川朗子・永田道弘・宮代康丈訳，名古屋大学出版会，2012 年〕

23）河野與一『岩波講座哲學〔現代の哲學〕現代佛蘭西哲學』，26 頁。

24）岩下壮一『岩波講座哲學〔現代の哲學〕新スコラ哲學』，岩波書店，1932 年。のちにこの著作は，吉満を編者とする岩下の著作『中世哲學思想史研究』（岩波書店，1942 年）に収められている。

25）ジャーク・マリテン『近代思想の先驅者――ルッター・デカルト・ルソー』岩下壮一訳，同文館，1936 年。

26）たとえば，稲垣は『現代カトリシズムの思想』（岩波書店，1971 年）で次のように述べている。「カトリック思想家においては，現代思想の特徴である科学的精神や経験主義の徹底が，人間の自己理解を深めていくという方向へと発展させられており，そのような方向において現代思想にたいする独自の寄与がなされているわけである」（20 頁）。

27）若松英輔『吉満義彦』，291 頁。